# 魔法少女リリカルなのは～Last War～

バクテリア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは～Ｌａｓｔ　Ｗａｒ～

【Ｎコード】

Ｎ９７７５Ｍ

【作者名】

バクテリア

【あらすじ】

事故に遭った主人公三人、目が覚めると知らない場所しかも体がガンダムになっている。この場所がリリカルなのはの世界だと知り、そして管理局の闇を知った彼らは管理局の闇と戦う決意をする・・・

## 「人生何があるかわからない！」（前書き）

こんな駄文でも読んでくれると・・・幸いです。

# 「人生何があるかわからない！」

## 第一話

「人生何があるかわからない！」

俺の名前は、工藤　陸（１８）何処にでも居そうなしがない高校生さ
今日は、オープンキャンパスに行ってその帰りだ

？「おっ！陸やないか」

陸「よぉ、正」

コイツは、平井　正（１８）今時珍しい熱血タイプだ、
俺の学校の剣道部部長、実力は全国大会で優勝するほど、
頭も悪くなく頼れる兄貴って感じな奴だな。

？「やっほー、二人ともこんな所で何してるんだい？」

正「進じゃないか」

陸「買い物帰りか？」

進「まあね」

進の説明は・・・やらなくていいか面倒だし・・・

進「いやいや、ちゃんと読者の皆さんに紹介してよ・・・（いるかわかんないけど・・・）」

いきなりメタなこと言っているが、仕方ない紹介するか・・・

進「開始早々僕の扱い酷くないかい？」

そんな事はない・・・じゃあ気を取り直して、
こいつの名前は、浅羽　進（１８）理系タイプだな

学年成績トップでロボット研究部の部長、
俺は見ていないがＮ○Ｋで放送されていた大会に出てたらしい・・・

陸「久しぶりに三人揃ったんだ、一緒に帰ろうぜ」

正・進「ええで（いいよ）」

陸「んじゃ・・・

キキィィィィィィィッ！！

ドンッ！！

そこで、俺達の意識は消えた・・・

## 「人生何があるかわからない！」（後書き）

感想・評価してくれるとうれしいです。

## 「転生？それとも憑依？」（前書き）

やっと投稿できた・・・

どうも、バクテリアンです。

主人公達の名前の読みを書いていなっかたので載せておきます。

工藤　陸　（くどう　りく）

平井　正　（ひらい　ただし）

浅羽　進　（あさば　すすむ）

**「転生？それとも憑依？」**

陸「うぅ・・・はっ！」

俺は、慌てて周りを確認したが暗くて何があるのかも分からない。

陸（此処は、いったい何処だ・・・何でこんな所に・・・）

陸（そうだ！！あいつらは・・・）

陸「おいっ、正、進！！」

正「いてて・・・」

進「もう～、ここどこ？」

物寂しく暗い場所に、あいつらの声は返ってきた。

陸「・・・お前らも、ここにいたんだな」

正「そういうお前もおったんやのう」

進「僕もいるよ」

陸「とりあえず、怪我とかはしていないか？」

正「ちょっと痛むとこもあるけど、多分怪我とかは・・・」

正が急に口を閉ざした。

進「ど、どうしたの正？」

正「どうしたもこうしたもあらへん・・・今自分の足触ってみたんやけど、明らかにおかしなっとる！！これやったらまるっきりロボットや！！」

陸「ロボット？」

正「お前らはどうなっとるんや！？」

陸「どうって・・・」

正の発言から、俺は手元も見えないまま自分の足を触ってみた。
金属独特の感触と冷たさが、触った手から伝わってきた。
これは明らかにおかしい。

陸「正・・・俺もお前みたいになってやがる・・・」

進「ぼ、僕もだよっ！！僕達、なんでこんな事になってるの！？」

進の言った事から、俺はそれまでの事を思い出そうとした。
確か俺たちは久々に一緒に帰れると思った矢先に・・・車に引かれたんだ。
じゃあ俺たちは死んだのか？だから体が冷たくなっているのか？
だがそれは何の解釈にもなってはいない。
この暗がりでは俺達の体ははっきりと見えない。
ただ一つわかるのは、これは恐らく俺の体じゃない。まったく違う何かになっているんだ・・・

正「とりあえず、これからどないすんや？」

陸「正、進、体は動くか？」

正・進「「何とか」」

陸「俺も少し動きにくいがどうにか動ける、ここがどうなってるのか、ちょっと確認してみよう」

正・進「Ｏ（はーい）Ｋ」

こうして俺達は痛みとぎこちなさが残る体を動かした。

その時、体の内部かと思える所から、機械的な音がした。
その音は正や進がいると思える所からもした。

陸（な、なんだこの感覚・・・）

正「おいおい！？なんで体動かしただけでこんな音すんや！？」

進「・・・もしかしてだけど、さっき正が言ったみたいに、僕達ロボットになってるんじゃないの？」

正「アホ言うなや！！あれは物の例えであって、何も本気で言う訳・・・」

陸「いや、この様子だとあながち違うとは言い切れないぞ」

正「・・・と、とりあえず、明るい所探そうや！そうすればわかるんとちゃうか？」

進「あ、僕の近くにスイッチみたいなのがある、押してみるよ」

そう言って進がスイッチを押した瞬間、暗かった部屋に光が行き届

いた。
さっきまで暗かっただけあって少し目がくらんだが、どうにか目が慣れてきた。
改めて周りを見ると、少し散らかってはいるが、研究所などでよくある物があった。
だが俺の視界にはそんな物など入らない程の物があった。
俺の目の前にいたのは、どう見てもあのガンダムそのものであった。
大きさそのものは多分俺と大差ない。

正「あれ・・・なんで俺の目の前に、ガンダムがおるねん！？」

そいつはなぜか正の声色と口調で喋った。いや、恐らくこいつは正その物なんだ。

陸「正、そういうお前もガンダムみたいだぞ。」

正「え！？マジか！？てかお前誰や！？陸みたいな喋り方しよってからに！」

陸「落ちつけ正、俺はお前の知っている工藤　陸だ。」

正「うそつけや！どう見てもあのガンダムやんけ！！」

陸「あのな、お前がガンダムになってるなら、俺もその可能性があるだろ？」

正「！！・・・それもそうやのう・・・」

陸「で、正に隠れて見えにくいが・・・」

進らしきガンダムが、正の影から顔を出してきた。

進「・・・僕も同じ？」

陸「・・・そうだな、正と型は違うが、ガンダムみたいになってる」

進「な、なんで僕達、こんな事になったの？こんなの絶対おかしいよ！！そうだ、これは夢だよ！きっと夢に違いない！こうやって頭を叩けばすぐにでも・・・」

そう言って進は自分の頭を叩いたが、何も言わずにじっとなった。

陸「進、どうだ？」

進「・・・痛いよ・・・」

正「夢やったら、痛い訳あらへんやろ？」

進「・・・僕達、これからどうなるの・・・元に戻れるの・・・」

進は涙声を出しながらうずくまった。
恐らく涙も出ないだろうに・・・

陸「それはわからないが、とりあえずここがどこなのか、探してみた方がいい」

正「そうや、まずはここがどこか、わかってる方がええやろ？」

進「・・・うん」

陸「じゃあ、周りにあるものとかで、何かわかりそうな物を探そう」

こうして俺達は、その部屋で探索を始めた。

正「そういや、わしらってガンダムになってるんやろうけど、なんや各々で形がちゃう気がするのう」

陸「俺が見た限りだが、正は００８３のガンダム試作１号機ゼフィランサス、進はガンダム試作３号機ステイメンになっているな」

進「陸は何だか太っちょだね」

陸「お前らが試作１号機と３号機なら、流れ的に試作２号機サイサリスだろうな」

正「にしても、なんでこんな事になったんや・・・」

進「あ！何かのファイル見つけた」

陸「ちょっと貸してくれ」

そして俺は、それに書いてある事を読み始めた。

## 「転生？それとも憑依？」（後書き）

駄文ですみません；

不定期ですが、一・二週間おきに投稿したいと思います。

できれば、評価等してください・・・

では、また。ノシ

## 「現状把握」（前書き）

はい、第三話です。

原作キャラの出番はまだまだ先です

申し訳ない；

毎回こんな駄作を読んでくれる人達に感謝感謝

「現状把握」

進が見つけたファイル開く

正「どないや・・・読めんのか？」

正が聞いてくる・・・

陸「読めることは読める・・・けど文字は英語でもドイツ語でもなさそうだ・・・」

進「あれ？なんで知らない文字なのに読めるの？」

正「それもうやなぁなんでや？」

進の言うとうりだ、知らない文字を読めるはずがない・・・
だけど今の俺たちはガンダム、つまりロボットだもしかしたら翻訳機能でも付いてるのかもしれない

陸「多分・・・この体の所為だろな、だけど今はありがたい」

そう言って俺は再びファイルの内容に目を落とした・・・

黙読中・・・・

進「どうなの陸？」

陸「・・・どうやら俺達は、リリカルなのはの世界に来ちまったみたいだな」

正「えぇ！？マジで言っとるんか、お前頭大丈夫か？」

俺もどうかしてると思うが、ファイル書いてあった内容には聞き覚えのある単語がいくつかあった

陸「断定はできない、だがデバイスに魔法・・・それにロストロギアことまで書いてある」

進「そこまで書いていたら、可能性はあるね・・・」

正「はぁ～・・・マジかいなぁ」

正は深くため息をついた

陸「とりあえず、他に何か手がかりがないか探そう」

正・進「「わかった」」

そして俺たちは他の部屋を手分けして探索し始めたが・・・妙だ・・・

何処にも人が居ない・・・机等を見てみるが埃は殆ど無い

人が居た形跡もある、何かあったのか？

考え込んでいると進の声が聞こえた

進「二人ともこっちにきて～」

俺は声がした方向に向かい

途中、正と合流し進の居る方に向かった・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・

・・・・・・

進がいる部屋のドアを開け、辺りを見る

部屋にはコピー機が数台置いており、おそらく事務的な事をするための部屋みたいだ
その一角に進が居た

陸「何か見つかったのか進？」

進「うん、これ」

進が指差す机にはキーボードらしき物がある、だが何処にもモニターらしき物はない

正「なんやこれ？パソコンかいな？」

陸「けどモニターがないな・・・」

進「物は試しだし、とりあえず起動してみるよ」

進はパソコン？の電源を入れる、すると本来モニターが在ろう位置に画面が投影される

正「うぉ！？なんで何もないところに画面が映るんや？」

正が驚き

陸「すごいな・・・」

俺も驚きを隠せなかった
俺らが驚いている間に進は黙々と操作している、進はロボ研でプログラムを作ったりＯＳを弄くったりしているため、こういった電子機器関係は進の得意分野だ

進「すごいよコレ、こんなハイスペック見たことない！！」

興奮しながら操作する進すると、突然手が止まった

陸「ん？どうしたんだ？」

進「ねぇ、これ見て・・・」

すると進は一つのファイルを開いく・・・
そこにはこう書かれていた

ーーーーーー試作ガジェットおよび専用ＡＩの開発ーーーーーー

今回の開発プロジェクトは、従来のガジェットと違い単機でＳランク魔導士と渡り合える機体の開発である

シュミレーションにより最も性能を発揮した人型を元に開発、高性能および小型化を重点的に開発、そして見事成功
しかし、極端な小型化の為（全長約２．２０ｍ）、内部構造に余裕が無くＡＭＦ発生装置の搭載は断念した

現段階では試作機３機の開発に成功、これらをＧＰ－０１、０２、０３と命名、性能面においても問題はなく、各武装は既に完成
しかし、従来のＡＩでは機体の制御が困難であり、新たに専用ＡＩを作製する必要ありと判断

機体に関して

名称：ＧＰ－０１
コンセプト：汎用性を重視して開発した機体
　特徴　：陸戦が基本となっているが専用パーツに換装する事により空中戦においても高い能力を発揮する
　　ただし、三機の中では一番火力が低い

（空中戦仕様の場合はＧＰ－０１ｂとする）

名称：ＧＰ－０２
コンセプト：核等の大量破壊兵器搭載を前提に開発した機体
拠点攻撃が基本であり、戦術・戦略兵器としての意味合いが強い

特徴　：核等の爆風に耐える為、重厚な装甲と専用の大型シールドが基本装備となっているが、両肩のバーニア計６基により、見た目よりも遥かに高い機動力を持っている
現状は特に欠点が見られず完成度の高い機体となっている

上記の武装とは別に通常兵器による中距離支援型重爆撃装備も開発

名称：ＧＰ－０３
コンセプト：空中戦を視野において開発した機体

特徴　：高い機動力を持ち空中戦を得意とする
武器も豊富で火力も高い
火力強化ユニットとドッキング可能

この機体は専用の火力強化ユニットとのドッキングが可能であり、それにより圧倒的な空間制圧能力を持つことができる

ただし、ユニットに関しては製作途中である

内容を読み終えた瞬間、正が口を開いた

正「おいっ！これってまさか・・・俺らのことか！？」

陸「多分な、どうやら此処はガジェット開発の研究施設みたいだな・・・」

進「そうみたいだね・・・」

まさかこの体がガジェットとは思いもよらなかったが
これで、この場所については少しだが解った、だがもっと情報がほしい

陸「とりあえず、この建物の全体が知りたいな・・・進、此処の見取り図を表示できるか？」

俺が進にそう言うと

進「わかった、ちょっと待ってね」

進がキーボードを操作すると別の画面が表示される
表示された画面によるとこの施設は地下にあり六つの区画でできていて、発電・空調区画、部品製造・資材格納区画、整備・機体格納区画、居住・資料保管区画、開発・研究区画、情報統括区画このように構成されているようだ

陸「で、俺らは何処にいるんだ？」

進「ここだよ」

どうやら開発・研究区画のようだ

陸「とりあえず此処についてはある程度わかったから他の区画を調べてみるか」

正「せやな、じゃあ何処に誰が行くか決めよか」

進「僕は、このパソコンで他に何かないか調べておくよ」

陸「わかった、じゃあ俺が居住・資料保管区画、正が整備・機体格納区画を調べてきてくれないか？」

正「任せとき、ほな行ってくるわ」

そう言って正は部屋を出て行った

陸「じゃあ俺も行くか」

進「気よつけてね」

そして俺は居住・資材保管区画へと向かった・・・・・

## 「現状把握」（後書き）

相変わらず展開が遅い・・・
もっと早く話進まないかなぁ・・・（・ω・、）

それと、感想を書いてくれた人に感謝^^
引き続き頑張っていきたいと思います。

評価とかお願いします。

## 「現状把握2」（前書き）

今回は早めの投稿

ゆっくりしていってね

## 「現状把握2」

陸side

陸「ここか・・・」

無事に資料保管区ついた俺は保管されている資料を調べていく・・・

（ガジェトの開発や研究の資料がほとんどだな・・・）

さらに調べているとある項目に目が止まった、そこにはこう書かれていた

””人造魔導士の製作とその課程””

俺は嫌な予感を感じながら資料読んだ・・・

・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・

陸「こんなのが人がする事なのか・・・」

資料に書かれていた物はどれもこれも酷いものだった、遺伝子操作
によるリンカーコアの強化、
薬による肉体強化、他にも様々な実験内容が書かれていた
どれもこれも倫理に外れた行為ばかりで胸糞悪くなった

これは二人と話し合った方がいいな・・・

俺はそう思いその資料を持って、元来た道を引き返した

これからの方針を考えながら・・・・

正ｓｉｄｅ

正「かなり広いなぁ此処」

整備・機体格納区画に到着した正は周りを見渡した
区画の名前どうり整備用のオイル等が置いてある
それ以外には特に無いようだ・・・

正「ん？向こうにもえらいでかい扉がなるな」

視線の先には正の背丈の倍はある扉があった

正「とりあえず開けてみるか・・・」

そう言って扉を開けてみると、そこには信じられない物があった・・・

頭を全部覆うガスマスクの様な頭部、排気口から後頭部へ伸びる動力パイプ、左肩に棘の付いたショルダーアーマー、そして緑と黒に塗装された体

大きさは正と変わらないが、どう見てもジオン軍の主力モビルスーツ、ＭＳ―０６ザク？だった、しかも十機もある

正「すげぇ～ザクだぁ～！！！」

興奮しながら近づき触れてみる正

正「まさかザクがあるとは思わんかったなぁ」

そう言いながら、しばらく触っているとザク達が突然動き出した

ザク達『システム起動を確認、動力部および各センサー異常なし』

そしてザク達は正の姿を見るやいなや、整列し敬礼をした

驚きを隠せない正が唖然としていると、一機のザクが喋りだした

ザクＡ『当機含めＭＳ―０６Ｆ　ａ－１からａ－１０は登録Ｎｏ．００１　ＧＰ－０１ゼフィランサスの指揮下に入ります。』

正「えっ？ちょ！いきなり何がどうなってんねん」

ザクＡ『どうかしましたか隊長？』

なんや、俺が隊長みたいな事になってるけど、意味解らんわ！？

正「いやちょっと待ってぇな！隊長って俺の事か？」

ザクＡ『はい、我々はＧＰ－０１ゼフィランサス、または０２・０３を隊長に隊を組むようにプログラムされています。』

なんやめんどくさい事になってけど、まずは彼らから情報を得る事が優先やな

そう考え、彼らに此処の事や彼らの事を聞くことにした

正「じゃあ聞きたい事があるんやけどいいか？」

ザクA『なんでしょうか？』

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・

ザク達から教えてもらった情報を纏めるとこうだ・・・

ここは、第６８無人世界にある研究施設であることが分かった
ここは、星全体が荒野で、ここに居た研究員以外は人は住んでいないとのこと
これ以上此処に関する事は彼らのデータには無い様だ

次に彼らの事である
彼らは自分たちよりも先に開発された量産型で、量産型のＡＩは既に完成しているようだ、初期段階でもある程度の意思疎通はできるらしい
彼らは、試作段階から使われているらしく、流暢に喋る
十機しか完成していないのは、まだ量産開始直後であるためとのこと

正がなぜ隊長扱いなのかは、開発記録には書いていなかったが、ＧＰ－０１・０２・０３は指揮官機でもあったらしく
完成しだい指揮官登録される予定だったようだ

理由は解らないがなぜか、彼らの担当者は先走って、機体登録をしてしまったらしい
その為、正が隊長なってるらしい

しかし、なぜ此処に人が一人も居ないのかは彼らも知らないようだ

質問し終えると、一人のザクが質問してきた
登録されているためか、こちらの事を警戒してはいないようだ・・・

ザクＣ『ところで隊長』

正「なんや？」

ザクＣ『隊長と同系列のＧＰ－０２・０３が見当たりませんが、何処に居るんでしょうか？』

正「あいつ等は、あいつ等で情報収集しているで」

ザクＣ『では、一旦合流した方が良いのでは？』

確かにそろそろ合流した方が良いかもしれない

正「それもそうやな、よし、ほな合流しに行くで」

ザク達『了解』

そして、正達は進の所に向かった・・・・

## 「現状把握2」（後書き）

色々と無理がある内容でしたがここでザクを出しておかないと話が進まないので
出しました。

反省も後悔もしている。

では、また次回

**「合流」（前書き）**

やっと投稿ができました。

遅くなってすみません（ｗ；）

次は早く投稿したいです。

## 「合流」

進「やっぱり、此処の技術はすごいなぁ」

カタカタと・・・パソコンを操作する進、するとドアの方から声をかけられる

陸「進、戻ってきたけど、調子はどうだ？」

進「うん、結構いろんな情報が集まったよ、そっちは？」

陸「こっには、特に必要な情報はなっかた、だけど後で相談したい事がある・・・」

進「わかったよ、じゃあ正が戻って来るまで休憩してよっか」

陸「そうだな」

とりあえず、俺達は正が戻って来るまで休憩することにした・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・

あれから３０分ぐらいたったが、正が戻ってくる気配は無い

進「遅いね・・・」

陸「こんな事だったら、戻ってくる時間決めとけばよかったな・・・〜〜

さすがに、心配になってきたので探しに行こうとした時である・・・

正「戻ってきたでぇ」

どうやら戻ってきた様である、ドアの方を見るとそこには正が居た

しかし、俺らにはその後ろに居る存在に目を丸くした

陸「お・・・おい正、その後ろに居るのはまさか・・・」

正「そやっ、ザクやで」

陸「まじか・・・」

正「マジや」

暫くの間、沈黙が続いた・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・

正「まぁ、大体こんなもんやな」

進「へぇ～そんな事があったんだ」

陸「しかし、ザクまで在るとは予想外すぎだろ・・・」

あれから正にザク達の説明をしてもらった
ちなみにザク達は、部屋の反対側に待機してもらっている

進「そう言えば、陸が話し合いたい事があるって言ってたよね？」

陸「あぁ・・・」

正「何や、なんかあったんか？」

陸「とりあえず、これを見てくれ・・・」

陸が真剣な声で言う、それを感じて二人も真剣になる

陸は資料室で見つけた書類を二人の前に出して、
その内容を話した・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・

話し終えて一息つくと、俺は二人に聞く

陸「二人とも、これを見てどう思う？」

正「聞くまでもあらへんやろ、なんて奴らや、命をなんやと思ってんねん！！」

書類を床に叩きつけ、怒りだす正・・・

進「こ、こんなの人のする事じゃない・・・」

声が震えている進・・・

沈黙が続く・・・
重く圧し掛かる空気の中、俺は口を開く・・・

陸「なぁ、俺はこいつ等と戦おうと思う」

俺はそう言う・・・
二人は俺の言葉に驚愕している
当然の反応だ、ついさっきまで、ただの学生だった奴が犯罪者達と
戦うなんて、正気の沙汰じゃない

陸「勿論、反対だったら反対してくれてもいい」

俺は二人の回答を待つ・・・

正「俺は陸に賛成や、こんな奴ら許して置けるかい！」

正は賛成してくれた、後は進だが・・・

陸「進はどうなんだ？」

進に聞く・・・

進「僕も賛成だよ、陸達だけじゃ心配だしね」

進も賛成してくれた

陸「二人とも、ありがとう・・・」

俺は二人に心から感謝した

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・

俺達はこれからの方針を決める事にした

正「で、どないすんや？」

正が聞いてくる

陸「そうだな・・・」

俺は顎に手を添えながら答える

陸「まずは、情報収集と戦力把握・強化それと俺達自身の強化だな・・・」

俺がそう答えると、正が聞いてくる

正「俺達の強化って具体的にどうするんや？」

陸「此処はＡＩも開発している、だからＡＩに経験を積ます為のシュミレーターが在る筈だから
それを使っていこうと思う」

進「じゃあ、戦力強化は？」

今度は、進が聞いてくる

陸「ザク達を予備パーツ含めて、可能な限り量産する」

進「・・・先に聞いておくけど、誰が造るの？」

陸「勿論、進」

進「まあ、わかってた（笑）」

苦笑いする進

陸「じゃあ、役割分担を決めるか」

ちなみに役割はこうなった

陸　格納区画にある武器・弾薬庫の調査

正　陸と同じ

進　ザク達を連れて部品製造区画の調査、その後情報収集

こうなった、そして各自行動を開始する

進「気よつけてね、二人とも」

陸「そっちもな」

正「お前ら、進の事任せたで」

ザク達『はっ、了解しました！！』

進達を見送った、俺と正は武器・弾薬庫へと、足を進めた・・・

## 「合流」（後書き）

まだまだ先は長いなぁ・・・

これからも頑張って続けていくのでよろしくお願いします。

## 「調査」（前書き）

一ヶ月も遅れてしまって申し訳ない（ーwー；）

## 「調査」

陸・正　side

格納区画にある二重扉の先、そこに武器庫がある
俺達はその扉を開け中に入っていった

陸「此処が武器庫か・・・」

正「いっぱいあるなぁ～」

照明で明るく照らされ、黒光りする銃が、所狭しと並べられていた
俺が周りを見ていると、正が聞いてきた

正「なぁ、陸・・・お前この銃の判別できるか？」

陸「ちょっと待ってろ、調べてみる」

そう言って、俺は一丁の銃を手に取り調べる・・・

陸「記憶が正しかったら、これはＭＭＰ－８０だ」

正「まじか、そんならザク・バズーカとかもあるんちゃうか？」

陸「そうだな、よし正、二手に別れて詳しく調べるぞ」

正「じゃあ、俺こっちの方、調べてくるわ」

俺達は二手に別れて、調査を開始した

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・

一時間ほど調べた結果、武器庫に在った物

ＭＭＰ－８０　６０丁

ザク・バズーカ　２５丁

ヒートホーク　６０本

クラッカー　１００個

脚部三連装ミサイル・ポッド（二つで一セット）　２０セット

そして、俺達用の武器も見つけた

ＧＰ－０１ゼフィランサス

ビームライフル　ＢＡＵＶＡ・ＸＢＲ－Ｍ－８２－０５Ｈ

ビームサーベル　（形式不明）

０１専用シールド　ＲＸ・Ｖｓｈ－０２３Ｆ／Ｓ－０４７１２

ＧＰ－０２サイサリス

ビームライフル　BAUVA・XBR－M－82－05H

ビームサーベル　A・E・blashAEXB－909L

ラジエーターシールド　NR－Sh－02－RX／S－00013

アトミックバズーカ　AE／ZIM・G－BAZ－0186－A　（弾頭無し）

多連装ロケットシステム　MLRS

GP－03ステイメン

ビームライフル　（形式不明）

ビームサーベル　（形式不明）

フォールディングバズーカ　（形式不明）

フォールディングシールド　（形式不明）

弾薬については、数える気が失せるほど大量に在った

そして俺は思った、幾等なんでも在りすぎだと・・・

陸「さてと・・・これ以外はもう此処には無いかな？」

正「そうみたいやな」

陸「それじゃあ、一旦戻るか・・・」

正「せやな、そうするか」

そう言って、武器庫を出た俺の目にある物が目に留まる・・・

格納区画の一番奥、そこに自分達が入ってきた扉の倍はある扉を見つけた

俺は正に聞く

陸「なあ、お前が初め此処に来た時、あの扉の中調べたか？」

正「いんや、と言うか陸に言われるまで気づかんかったわ」

陸「じゃあ、あそこも調べるか・・・」

正「せやな、何が在るか気になるし」

陸と正は扉の前に行き・・・そして、その扉を開け、中に入っていった・・・

side out

## 「調査」（後書き）

アンケートを採りたいと思います

内容はマッドサイエンティストこと、スカさん達と主人公達の関係です

1. 友好・同盟
2. 敵対
3. 中立または、干渉していないからの敵対

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9775m/

---

魔法少女リリカルなのは〜Last War〜

2010年12月16日02時00分発行